
三つの構造： キアスムス、プロップ、レヴィ=ストロース

松村一男

—Abstract

Many species of fauna and flora are in symmetrical in form. This does not only occur with living beings; we also see symmetry in the arrangement of atoms in a crystal. Symmetry enhances balance, and therefore stability. Nature shows abundant variations in forms, but at the deepest level it has a symmetrical structure. In nature, there exists an unnoticed innate structure. Man makes things while not always being conscious of symmetry, but when we look at our bodies, designs, buildings, and family crests, the results are most often symmetrical. We probably choose symmetry unconsciously or instinctively because, as mentioned earlier, it makes us feel comfortable and secure. It is then assumed that such symmetry exists in writings at all levels of a sentence, paragraph, and text.

There is a problem. When symmetry is employed in writing, the beauty of balance will be apparent, while the need for new expressions remains unsolved. We need variations for new expressions. This conflict of stability and innovation can be reconciled by introducing partial innovations that do not damage the entire symmetry. Since the totality is the sum of the parts, by introducing a similar or inverted element in a symmetrical position to the opposite side of a corresponding constituting part, the total symmetry remains stable, while new elements are introduced in the parts to produce new expressions.

This type of a technique of maintaining symmetry while at a same time producing new expressions is known by various names, such as chiasmus, chiasitic structure, inverted structure, ring composition, *hysteron proteron*, and V-structure. This technique has been in practice since antiquity and modern researchers find it in the Old Testament, the New Testament, the *Iliad*, the *Odyssey*, and so on.

In this paper, I discuss several aspects of this technique. One is a review of the research history. In the process, I will inevitably touch upon two other modern, so-called structural analyses of myth: One by a group of formalists such as Vladimir Propp, Otto Rank, Lord Raglan, and Joseph Campbell; the other by a group of French structuralists such as Georges Dumézil and Claude Lévi-Strauss. I will review the research history of these three groups and argue that two are useful, but one is not worthy of the name structure. I also argue that we could have made faster progress in the humanities if the technique of the inverted structure was widely shared by modern mythology researchers.

Lastly, I will give a bibliography of various studies about the technique of inverted structure. The bibliography shows this technique is still quite active not only in literature but in art and architecture.

— 要旨

人間、動物、植物など生物の多くは左右対称（シンメトリー）になっている。原子の配列や結晶もそうである。均衡による安定性がその要因だろう。これは表面的な差異より深い水準で、意識されることなく存在する構造であるともいえるだろう。人間が作り出す建築や紋章のデザインも左右対称なものが多い。シンメトリーは無意識のうちに（つまり本能的に）安定性を感じさせ、選択されることが多いと思われる。だとすれば、言葉による表現やそれを文字に固定した文章においてもシンメトリーは存在すると仮定してよいだろう。

しかしシンメトリーのままでは安定は表現されるが、それ以上のメッセージの表現は難しい。そこからヴァリエーションを使う動機が生じてくる。全体のシンメトリーを保持したままヴァリエーションを導入するには部分の変化を使うことになる。全体のシンメトリーとは各部のシンメトリーの総和であるから、各部の対応に同一ではなくて類似ないしは逆転の要素を用いるなら、全体のシンメトリーを保持したままに変化を表現することが可能になる。そうした安定性と変化の両面を可能にする文章構成技法は以下に紹介するように古くから世界各地で行われてきた。

本稿ではこの問題についていくつかの側面を指摘してみたい。一つは、こうした構造化の研究の歴史の紹介である。第二には、それが異なる分野において十分な情報の共有なしに行われてきた結果、もっと早期により豊かな展開が実現した可能性が残念ながら失われてしまったことの指摘である。第三には構造化の広がりへの紹介である。もっとも顕著なのは文章構成法の分野だが、その他の分野においても同じ原理に基づく構造化は認められる。

1. 伝統的言語文化における文章構成技法としての折り返し構造

フォークロア研究、神話学、西洋古典学、聖書学（旧約学、新約学）に共通するような伝統的言語文化の表現技法がある。分かりやすい例としては、J.F.ケネディーが1961年1月20日に大統領就任演説で用いた表現 Ask not what your country can do for you – ask what you can do for your country がある。この命令文では ask ~ can do という動詞句を持つ二つの文章が並べられているが、それぞれの your country と you, for you と for your country という対応する語句が前半と後半では入れ替わり、a, b, b', a' という形となっている。前半と後半で対応する要素の順番が交差してエックス (X) をなすこうした表現はキアスムス (chiasmus) と呼ばれることがあるが、それはギリシア語の χ の呼び方 (khi, chi) に因んでである。

前半と後半の対応する要素の数はさらに多い場合 (a, b, c, d, d', c', b', a') もあるし、中央に折り返し地点を入れる形 (a, b, c, b', a') もある。後者の形では中央の折り返し点に最も強調したい要素が置かれることが多い。中央に折り返しの要素があるタイプをないタイプと区別したい場合には、ある方を concentric と呼んで区別することもある。

こうした文章構成法は日常でも無意識に行われているようだ。たとえば以下のやり取り

もそうだろう（日本経済新聞 2019・3.18 首都圏朝刊、伊藤雅俊「私の履歴書」）。(上司の発言)「私はハンコは押さない (a)」、(伊藤)「責任は私が取ります (b)。ハンコは押さなくても結構です (a')」。このやり取りは a, b, a' の形になっている。a と a' は「ハンコ」と「押す」という共通の語彙を持ち対応しているが、a' は a を否定している。そして重要なのは両者の挟まれた b の「責任は私が取ります」である。

こうした文章構成法はそれを意識文単位に留まらず、段落、章、さらには作品全体についても可能であるし、以下に見るように実際、行われてきている。

表現を流し込む枠組みを用いる文章構成法は、さまざまな分野で気づかれてきた。対応関係一般として言語学ではパラレリズムという言い方がある (Jakobson 1966)。旧約学・新約学ではキアスムスとかキアスムスの構造 (chiastic Structure) という呼び方多い (中務 2013)。西洋古典学ではリング・コンポジション (ring composition) とかヒュステロン・プロテロン (hysteron proteron、「前後逆転」の意) とかインクルシオ (inclusio) と呼ばれていることが多い。フォークロア研究では折り返し構造 (inverted structure) とか V 字構造とも呼ばれる。

もちろん、これらの用語が表しているものは全く同じではない。しかしいずれの用語も基本的な考え方は同じなので、本稿ではそれらの用語の違いについては取り上げず、特に区別が必要な場合には異なる用語も用いるが、技法それ自体についての議論においては「折り返し構造」の語を用いることにする。

諸学問分野の交流は理念的には理解され、現実にも多く試み慣れているが、ここでの用語の多様性、不統一が示すように、必ずしも実現化していない。方法論においても、それぞれの分野が独自に発案したと以为っていても、実は他分野においても同種のものが発案されており、相互にその存在を知らないままであるということが認められる。最初に取り上げるのはそうした学説史の空隙の指摘であり、この指摘によって相互理解の必要性の再確認をしておきたい。

2. 折り返し構造の研究史

共和政期ローマの政治家・弁論家のキケロはホメロスにおいて折り返し構造が用いられていることに気づいていたとする説がある。キケロが友人アッティクスに宛てた手紙の中で、彼は「後のことから先にお答えしよう、ホメーロス風に」(hysteron proteron Homerikos) とそこだけギリシア語で書いている (Cicero, *Ad Atticum* 1, 16, 1. 根本和子他訳『キケロー選集』13、書簡 1、岩波書店、2000、p.44)。この表現についてバッセットはいくつかの問いが寄せられた時に逆の順序で答えられていくキアスムス的な場面がホメロスには数多くあることを指摘し、キケロはそれを踏まえて、つまりキアスムスの存在を意識していたから、アッティクスの質問に答える際にこう書いたのだと指摘した (Bassett 1920)。

実際、キケロは演説において次のような表現を用いている。Si consul Antonius, Brutus hostis ; si conseruator rei publicae Brutus, hostis Antonius (もしアントニーウスが執政官なら、ブル

ートゥスは国家の敵である。もしブルートゥスが国家の守護者なら、アントニーウスは国家の敵である) (根本英世・城江良和訳「ピリッピカーアントニーウス弾劾・第四演説」3・8、『キケロ選集3 法廷・政治弁論Ⅲ』岩波書店、1999、240頁)。これは前半と後半は a, b, b', a' のキアスムス構造である。バセットがキケロの「ホメロス風」という表現がキアスムスを指していると考えたのは正しい。キケロは自分も「ホメロス風」にキアスムスを演説において実践していたのだ。

また18世紀英国で英国国教会の主教にしてオックスフォード大学で詩学の教授であったロバート・ロース Robert Lowth (1710-1787) は聖書の詩についてラテン語の著作 *De Sacra Poesi Hebraeorum Praelectiones Academicæ* (Oxford: Clarendon, 1753) において詩句の並行対応 *parallelismus membrorum* を指摘したが、前部と後部で順序が逆転するキアスムス(折り返し構造)を定式化するまでには至らなかったという(関根1978:「第2章 学問的諸前提」62-64; Jakobson, 1966: 399-400; Radday 1981: 50, 113 n.1)。このように古代や近世においても折り返し構造は気づかれていた。しかしそれを明確に意識して作品の分析に用いることは20世紀前半の西洋古典学ではバセット (Bassett 1919; 1920)、そして聖書学ではルンド (Lund 1930ab) まで待たねばならなかった。

3. 具体例の紹介

いくつか具体的な分析例を紹介しよう。最初は旧約聖書創世記の人類の創造の箇所である (Douglas 2007: 15)。

- 2.5 土 (ādāmah) を耕す人 (ādām) もいなかった。
- 2.7 主は土 (ādāmah) の塵で人 (ādām) を形づくり
- 2.15 主はエデンの園を耕し守るため人を連れてきた
- 2.17 人 (ādām) は善悪の知識の木から取って食べてはいけなかった
- 2.21-24 独りでいるのは良くないと主は人 (ādām) から助け手を作った。
人は男 (īsh) と女 (īshshah) になり、二人は一体となった。
- 2.25 二人とも裸 (ārūmīm) だったが、恥ずかしいとは思わなかった。
- 3.1-6 しかし賢い (ārūm) 蛇は彼らに主に背くよう唆した。
- 3.7-10 二人は自分たちが裸であることを知り、恥じた。
- 3.16 二人の調和は壊れ、男 (īsh) は女 (īshshah) を支配することになる。
- 3.19 人 (ādām) はそこから取られた土 (ādāmah) に帰る
- 3.22 それは人が命の木から取って食べ永遠に生きることがないようにである。
- 3.23 人 (ādām) は土 (ādāmah) を耕さねばならない、
- 3.24 エデンの園は命の木を人 (ādām) から守るため、新しい番人を置いた。

人の土からの創造、それに次ぐ男女への（平等な）分離、楽園での生活という前半は、蛇の誘惑を折り返しに逆転する形で後半となる。後半は楽園から追放され、男女の不平等の発生、死により人が土に帰ることが述べられ、前半と折り返さないしは逆転の配置となっている（a,b,c,d,e,d',c',b',a'）。こうした配置は物語のまとまりの中でどこが最も重要な箇所であり、つまりは何が最も伝えたいメッセージであるかを示している。

『イリアス』はアキレウスとアガ멤ノンの「争い」で始まり（第1書）、アキレウスとプリアモスの「和解」で終わっている（第24書）。最初と最後が対応している。そればかりでなく、最初の書と最後の書のエピソードもそれぞれ見事に対応している（Whitman 1958: 260）。第1書では、

- a. アポロンによるギリシア軍への疫病の罰、そのため亡くなった多くの戦士たちの葬儀
- b. アキレウスとアガ멤ノンの争いとそれによるアキレウスの戦場からの撤退
- c. テティスとアキレウスがゼウスに対し、ギリシア軍に懲罰を与えるようにと懇願
- d. 疫病を終わらせるためトロイのアポロンの神官クリュセイスのもとにギリシア軍の使者が赴く

e. テティスとゼウスが英雄の運命を定める

f. オリュンポスでの神々の争い

という流れになっている。これに対して最終第24書では、

f' オリュンポスでの神々の争い

e' テティスとゼウスが英雄の運命を定める

d' プリアモスが息子ヘクトルの亡骸の返還を求め、トロイからギリシア軍の陣営に赴く

c' テティスとアキレウスにゼウスからの伝言が伝えられる

b' 和解とヘクトルの亡骸の返還

a' ヘクトルの葬儀

と逆の順序で対応する要素が配置されている。

『古事記』の海幸山幸神話にも折り返し構造は用いられている（大林 1984：173-175. Cf. Pop 1973）。

a. ニニギの天降り（天地という宇宙領域の分離）

b. コノハナサクヤビメの火中出産（山神の娘、密封された産屋、三人の子）

c. 海幸山幸兄弟の道具交換（猟具・弓矢と漁具・釣針／山と海）

d. 奇跡の物体と海陸交通（兄から借りた特別な釣針が失われ、それを探しに海の世界

- に赴く。そのために使うのは籠製の船＝植物・人工・文化)
- e. 奇跡の物体 (人の口から吐き出しされた珠が容器に固着する)
 - f. 愛 (山幸とトヨタマビメが出合う。男女の結婚に至る愛)
 - g. 結婚 (転回点、物語の筋はここから逆の順序で進む)
 - f. 愛 (故郷への望郷の愛、夫婦の分離に至る愛)
 - e. 奇跡の物体 (魚の口から釣針が取り出される＝分離される)
 - d. 奇跡の物体と海陸交通 (岳父である海神から潮を操る特別な珠が贈られる。鰐に乗って地上の世界に戻る。鰐＝動物・自然)
 - c. 兄弟との交換 (潮を操る珠によって兄を懲らしめ、服従させる＝地位の交換)
 - b. トヨタマビメの水辺での出産 (海神の娘、未完成の産屋、一人の子に二人の母)
 - a. トヨタマビメは海の世界に戻る (海陸という宇宙領域の分離)

4. 形態学：モチーフの時系列配置の構造

しかし折り返し構造の認知は人文科学・社会科学に広まったとはいいがたい。そして独立して別のタイプの構造が指摘され、一般社会にはそちらの方がむしろよく知られるようになった。

こちらの構造とは物語において時系列に沿って一定の要素が並ぶことを指摘したもので、英雄神話でその生涯が一定の要素が一定の順番に並んでいることが多いことから気づかれた。よく知られているのはドイツのオットー・ランクの『英雄誕生の神話』(Rank 1914、邦訳 1986) と英国のロード・ラグランの『英雄神話』(Raglan 1936、邦訳 1975) の説であろう。

ランクはサルゴン、モーセ、カルナ、イオン、オイディプス、聖グレゴリウス、イランの王子ダーラフ、パリシ、テレポス、ペルセウス、ギルガメッシュ、キュロス、ペルシアのカイ・ホスロー、ペルシアのフェリドゥーン、トリスタン、ロムルス、ヘラクレス、イエス、ゾロアスター、仏陀、ジークフリート、ローエン格林、シェーフの子シュルド(Scyld) の 23 人を取り上げ (ランク 1986: 27-101)、共通にみられる特徴として、

- ①身分が高い両親の子 (たいていは王子)
- ②誕生時の困難
- ③捨て子 (たいていは小さな箱に入れられて水に委ねられる)
- ④動物か身分の低い者に救われて乳を飲ませてもらう
- ⑤成長して両親に再会するが、父親に復讐するケースと、認知され出世して名声を得る。

という五要素を挙げて、父母との正常な関係が阻害されていると指摘し、英雄像とは集団的自我であるとした (ランク自身は要素別に分けていないので、本稿のように五つに分ける他、

十、あるいは十二に分ける論者もいる。ランク 1986 : 102-103)。ランクはフロイトの弟子だから、こうした集団的自我像である英雄は当然エディプス・コンプレックスを反映したものと説明される (ランク 1986 : 103-196)。

これに対してラグランは英雄神話すべてに共通する 22 の定型があるとして、その理由として儀礼的背景を想定した (ラグラン 1975 : 153-154)。

1. 英雄の母は王族の一人
2. 父は王
3. しばしば母の近い姻戚
4. 通常でない妊娠
5. 神の息子とされる
6. 出生の時、父あるいは母方の叔父によって殺害の企てがなされる
7. しかし神隠しによって
8. 遠国で養父母に育てられる
9. 幼年期の記録はない
10. 成年に達すると未来に治めることになる王国に帰還あるいは出発する
11. 王 (または巨人、竜、怪獣) に勝利する
12. 王女 (しばしば先の王の娘) を娶る
13. 王となる
14. 暫くは平穏に国を治める
15. そして法を定める
16. しかし神あるいは人民の恩顧を失う。そして
17. 王位から追放される
18. 謎の死を遂げる
19. それはしばしば山頂においてである
20. 子供たちがいる場合でも彼らは王位を継がない
21. 亡骸は埋葬されない
22. 一つあるいはそれ以上の聖廟を持つ

そして、オイディプス、テセウス、ロムルス、ヘラクレス、ペルセウス、イアソン、ペレロポン、ペロプス、アスクレピオス、ディオニュソス、アポロン、ゼウス、ヨセフ、モーセ、エリヤ、インドネシアのジャワ島の王ワトゥ・グヌング (Watu Gunung)、スーダンのシルック族の文化英雄ニュイカンク (Nyikang)、シグルズ (ジークフリート)、ウェールズの王子スェウ・スアウ・ゲフェス (Llew Llawgyffes)、アーサー王、ロビン・フッドの 21 人について、それらの要素のうちのいくつが当てはまるかを検証する。挙げられている英雄の名前は当てはまる要素が多い順であり、最初のオイディプスはすべての要素を満たしてい

るとし、最後のロビン・フッドは十三の項目が該当するとされる（ラグラン 1975:154-163）。そしてラグランは、こうした英雄神話が共通の要素をもつのは英雄たちが実際の存在ではなく祭式から生み出されたためであると説くのである。ランクとラグランは手法もその結果の類似の指摘も似ているが、なぜ類似するのかという理由についてはそれぞれ依って立つ考え方の違いのために結論が異なっている。

また、おそらくランクとラグランとは独立にロシアのウラジミール・プロップ（1895-1970）は、魔法昔話について同じような一定個数の要素が一定の順序で配置されているとした（Propp 1928;1969、邦訳 1987）。モチーフの時系列配置の不動を認め、これを「構造」と称するこのタイプはプロップの言い方からフォーマリストとか形態学と呼ばれる。

プロップは登場人物の行為を機能と名付け、魔法昔話では 31 個の機能が同じ順序で配置されていると指摘し、魔法昔話は構造的に一つのタイプであるとした（Propp 邦訳 1987：第三章 登場人物の機能）。

1. 家族の成員のひとりが家を留守にする
2. 主人公に禁を課す
3. 禁が破られる
4. 敵対者が探し出そうとする
5. 犠牲者に関する情報が敵対者に伝わる
6. 敵対者は、犠牲となる者なりその持ち物なりを手に入れようとして、犠牲となる者をだまそうとする
7. 犠牲となる者は欺かれ、そのことによって心ならずも敵対者を助ける
8. 敵対者が、家族の成員のひとりに害を加えるなり損傷を与えるなりする
(8a. 家族の成員のひとりに、何か欠けている。その者が何かを手に入れたいと思う)
9. 被害なり欠如なりが〔主人公に〕知らされ、主人公に頼むなり命令するなりして主人公を派遣したり出立を許したりする
10. 探索者型の主人公が、対抗する行動に出ることに同意するか、対抗する行動に出ることを決意する
11. 主人公が家を後にする
12. 主人公が〔贈与者によって〕試され・訊ねられ・攻撃されたりする。そのことによって、主人公が呪具なり助手なりを手に入れる下準備がなされる
13. 主人公が、贈与者となるはずの者の働きかけに反応する
14. 呪具〔あるいは助手〕が主人公の手に入る
15. 主人公は、探し求める対象のある場所へ、連れて行かれる・送りとどけられる・案内される
16. 主人公と敵対者とが、直接に戦う
17. 主人公に、標がつけられる

18. 敵対者が敗北する
19. 発端の不幸・災いか発端の欠如が解消される
20. 主人公が帰路につく
21. 主人公が追跡される
22. 主人公は追跡から救われる
23. 主人公がそれと気付かずに、家郷か、他国かに、到着する
24. ニセ主人公が不当な要求をする
25. 主人公に難題が課せられる
26. 難題を解決する
27. 主人公が発見・認知される
28. ニセ主人公あるいは敵対者（加害者）の正体が露見する
29. 主人公に新たな姿形が与えられる
30. 敵対者が罰せられる
31. 主人公は結婚し、即位する

確かにこれだけ細かく規定すれば、魔法昔話の筋書きとしてはこれら機能の組み合わせとしてすべて説明できるだろうが、逆に物語一般の構造とはなりえない。

このタイプの「構造」とは、物語では一定数の要素が時系列にそって展開していくことがしばしば見られるというものである。この「構造」が広く知られるようになったのは、アメリカのキャンベルの『千の顔をもつ英雄』（Campbell 1949、邦訳 2015）によるところが大きい。キャンベルはランクやラグランのように英雄神話は一つのパターンに帰着すると述べているし、「英雄の旅」という名称で掲げている図もランクやラグランの定型と基本的には同じである。しかし興味深いことにキャンベルはランクの名前は出しても（ただし一箇所のみであり、それも自分の考えがランクの焼き直しであるとは認めていない。Campbell 1949: 322 n.5）、ラグランの名前をまったく出していない。プロップが西の世界に広く知られるようになったのは『民話の形態学』の英訳（1958年）以降だから、『千の顔をもつ英雄』にプロップの名前がないのは当然である。しかしラグランについてはそうではない。知らなければ不勉強だし、知っていて名前を出さなければ知的篡奪と言われても抗弁できないだろう。キャンベルがランクの方をより強調するのはキャンベル自身の考え方がより深層心理学的であり、ランクにより近いからだけである。キャンベルは英雄神話が個人の深層心理から生まれるからこそ、普遍的であり、現代にも必要とされると主張しているので、その主張を支えるためにもフロイト派のランクの名前は出すのだろう。しかし英雄神話の類似は儀礼のパターンから生じたためだというラグランの説明はむしろ自説には都合が悪いということで名前を出さなかったのかも知れない。

ランクもラグランもプロップも構成要素の独自性、そしていくつの要素が用いられるかなどの違いから異なった筋書きの英雄神話や魔法昔話が生じると考える。しかし、それは

表面的な違いであり、基本的構造に変化はなく、したがって、彼らの考える英雄神話や魔法昔話はキャンベルの用語を借りるなら「モノミス（神話の原形）」である（Campbell 1949: Prologue, The Monomyth）。

キャンベルは、英雄神話とは人類が普遍的に希求する「魂の成長」を物語るものだから必然的にワンパターンなのだと説明する。これに対してプロップは、以下で述べるように魔法昔話の普遍構造にそうしたメッセージ性は求めないし、与えようとしめない。しかしいずれにせよ、こうしたランクとラグランを参考に作られたキャンベルの英雄神話の構造、そしてそれとは独立にプロップが考えた魔法昔話の構造はともに単純で分かりやすく、一般大衆に広く受け入れられてきている（松村 2019: 第9章「キャンベルと『神話の力』」）。しかしこの形態学はワンパターンで発展も展開も期待できない。よく知られ世間で人気があっても、限られたタイプの物語の構造を指摘するものであって、構造一般の問題について学術的に貢献するものではない。

5. 構造主義

これまで述べてきたことから、物語の構造の研究において、相互に相手を知ろうとしない二つの流派があることが理解されよう。一つはより古くからある「折り返し構造」説、そしてもう一つのより新しいフォーマリスト・形態学・時系列要素構成派である。

さらにもう一つ、1960年代にフランスからブームとなったいわゆる「構造主義」のグループがある。これは言語学に由来し、より古い歴史言語学ないしは比較言語学をモデルとするものと、より新しい共時的な構造言語学をモデルとするものの二つがある。歴史言語学ないし比較言語学をモデルとする物語の構造の分析はフランスのデュメジルのものが1930年代から始まった。その後、デュメジルの影響も受けつつ、フランスのレヴィ=ストロースは主としてロマーン・ヤコブソンの音韻構造研究を中心とする共時的な構造言語学をモデルとする神話の構造分析を行った（デュメジルについては Littleton 1982、松村 2019: 第5章「デュメジルと『新比較神話学』」を、レヴィ=ストロースについては松村 2019: 第6章「レヴィ=ストロースと『神話の構造』」、第7章「レヴィ=ストロースと『神話論』」を参照）。

その後、レヴィ=ストロースの構造分析から刺激を受けたバルト、ラカンらの「構造主義」ブームがあったが（Lane 1970）、それは比較神話学の枠外なので、本稿では言及しない。

それとは別に、レヴィ=ストロース流の構造分析は聖書学と西洋古典学にも影響を与えた。聖書学の分野でのそうした研究としては後でも述べる英国の人類学者リーチのもの（Leach 1969; 1983）やフィシュ（Fisch 1982）などがある。西洋古典学ではヴェルナン（Jean-Pierre Vernant）、デュティエンヌ（Marcel Detienne）、ヴィダル・ナケ（Pierre Vidal-Naquet）、ロロー（Nicole Loraux）ら「パリ学派」の活動が目立った（Champagne 1992; Loraux et al. ed. 2001）。

6. 三つの構造研究の関係

これら「構造」をめぐる三つの立場からの研究はいずれも他の存在を知らないかあるいは無視している。とくに問題なのは、後発の二つがそれ以前から存在していた「折り返し構造」から何も学ばず、何か新しいことを発見したかのように思ってしまった点である。もちろん、研究の専門化が進む現代にあって他の領域の研究まで知ることは難しいかもしれない。ただ、そうした先行研究を知る機会があったのに、それがなされなかったのである。

ではいつそれが可能であったのだろうか。一つは1955年にレヴィ=ストロースがまず英語で発表し、その後フランス語版が論文集『構造人類学』に収められた論文「神話の構造」が話題となったときである (Lévi-Strauss 1955; 1958, 邦訳 1972)。この論文とそれに続くレヴィ=ストロースの北米と南米の先住民神話の分析は他の領域の研究者にも大きな刺激を与えて、ギリシア哲学とホメロス研究を専門とする英国のG・S・カークは『神話』(Kirk 1970, 邦訳 1976) を著し、メソポタミア神話についてレヴィ=ストロースに倣った構造分析を行った。しかし、カークはホメロス研究の専門家であり、それ以前から行われていた「折り返し構造」を用いた古典作品の研究を知っていたはずであり、レヴィ=ストロースの神話の構造分析のやり方が、それ以前からの神話の構造分析を知らずに行われており、そこから学ぶことでより豊かなものになると助言することはできたはずである。

もう一人、同じく英国の人類学者リーチもレヴィ=ストロースの手法に共感し、旧約聖書、新約聖書の構造分析を試みた (Leach 1969, 邦訳 1980; 1983, 邦訳 1984)。旧約聖書と新約聖書についても、リーチの研究以前に「折り返し構造」による研究がすでにな行われていたことはすでに述べた通りである。リーチが人類学者で聖書学におけるそうした蓄積を知らなかったとしても、聖書学者の方から「折り返し構造」との協同の提案があってもよかつただろう。

レヴィ=ストロースはプロップの英訳の書評 (Lévi-Strauss 1960) においてプロップの研究は時系列に沿ったもので限定的であり、神話研究には応用出来ないし、自分の構造分析は別物であると述べている。その通りだろう。

プロップはレヴィ=ストロースに対して、自著のイタリア語訳に反論を付した (プロップ 2009)。彼は自著をより内容に即した『口承魔法昔話の構成』というタイトルにしていたらこのような誤解を招かなかつたらうとしている。彼は昔話一般や神話まで及ぶ「構造」を示したのではないのだから、レヴィ=ストロースの自著への批判は当たらないとしている。これまたその通りであろう。

英雄神話や魔法昔話が一定の構造を持っているという指摘は、たとえランクやキャンベルがその構造が深層心理に由来すると主張したとしても、事実としては表層的な形式の指摘に留まるものであり、限られたカテゴリーについてのみ当てはまるもので、神話一般や

昔話一般、さらには人間文化一般の普遍性表現様式とは言えない。それは人間の思考が脳の深層部で構造化された言語表現が神話であるというレヴィ=ストロースの神話観とは全く異なるものであり（表層的／深層的）、したがってレヴィ=ストロースは自身の神話の構造分析において、フロイトについて言及することはあっても、ユングにもランクにもプロップにもキャンベルにも言及しない。レヴィ=ストロースは、彼の想定する構造が脳の無意識の活動に由来すると考えているので、フロイトの無意識観については同意し、その著作でもしばしばフロイト説を共感とともに評価し、他方、ユングの無意識観は別物であるとして、こちらは否定している（特に Lévi-Strauss 1985 chap.14、邦訳 1990）。

このようにプロップとレヴィ=ストロースは互いの研究は別個のものだと認めている。しかし、一部には両者を併用しようとする研究もおこなわれた。たとえばロラン・バルトは現代神話という卓抜な視点を編み出したが（Barthes 1957、邦訳 2005、ただしこれは構造分析とは無関係）、彼の物語の構造分析論や旧約聖書、創世記のヤコブのエピソードの分析はいずれも、彼がレヴィ=ストロースの構造分析を完全には理解しておらず、実践できていなかったことを示している（Barthes 1975;バルト 1979;関根 1978:124-131）。いわゆる「構造主義ブーム」は作られたものであり、カトリーヌ・クレマンによれば、レヴィ=ストロース自身は、「私がかたわらに並びたいと思う唯一の構造主義者はエミール・バンヴニストとジョルジュ・デュメジルです」と彼女に書き送っている（Clément 2002: 40、邦訳 2014: 45）。

ではレヴィ=ストロースは「折り返し構造」についてはどう考えているのだろうか。これについては彼自身による証言は見つかっていない。これも表層的な構造として無視したのかも知れない。しかし以下での折り返し構造研究の広がり紹介が示すように、折り返し構造は文章構成技法としてだけでなく、造形表現や儀礼行動においても認められる。そうした意味では脳の構造とも関係するような普遍的な文化構成要素と思われ、レヴィ=ストロースの構造分析とはむしろ補完的に共存しうる研究法と考えられる。

プロップには折り返し構造を見出す可能性があった。レヴィ=ストロースへの反論の中でプロップは「機能が対になって配置されていることに気づく。たとえば、難題の提示はその解決を伴い、追跡はその救出につながり……」と述べている。ここからプロップが折り返し構造に気づく可能性はあったろう。しかし彼は自身でこの対の構造を否定している（プロップ 2009: 45）。

個人的な意見だが、折り返し構造という「構造」はすでに古代において発見され、意識され、活用されてきた。現代になって形態学として発見されたという「構造」は深層に及ばない表層的なパターンの存在の指摘に過ぎず、「構造」の名には値しないだろう。そしてレヴィ=ストロースが発見したという「構造」は確かに構造であるが、しかし、本稿で示したように彼以前に「構造」が知られていなかったのではない。彼は構造を「再発見」したというべきであろう。

7. 折り返し構造を用いた研究の広がり

本稿のはじめの学説史の箇所ですべてのように、折り返し構造は聖書学と西洋古典学の分野で最初に研究が進められた。ここでは管見の範囲内ではあるが、それぞれの領域での研究を紹介する。英国の人類学者リーチは旧約聖書、新約聖書についてレヴィ=ストロースに倣った（と彼が考える）構造分析を行っているが（Leach 1969; 1983）、折り返し構造に基づくものではないので、ここには含めていない。なお、こうした研究の広がりについてはウェルチ・ダニエル・マッキンレー編の文献目録（Welch, Daniel, and McKinlay eds. 1999）とダグラス（Douglas 2007）に教えられたところが大きかったことを申し添えておく。ただし言うまでもないが、筆者の管見の範囲内での紹介なので、完全さからは程遠いものである。

ウェルチ編（Welch 1981a）にはこの他、アラム語文献、タルムード、モルモン教の聖典『モルモン経』の折り返し構造についての研究も紹介されているが、あまり一般的な領域ではないので、本稿では省略する（モルモン教の聖典が取り上げられているのはウェルチがモルモン教の大学であるブリハム・ヤング大学に所属しているためである）。

なお、文献紹介が過度に専門的・網羅的になるのは意図的に避けている。折り返し構造の広がりや研究における有効性を示すという本稿の目的であり、そのための文献紹介だからである。したがって、旧約・新約聖書各書の注釈書・コメンタリーをほとんど紹介していない。個別論文についてはネット上で閲覧しやすいので紹介してある。しかしこれも網羅的とはいえない。

折り返し構造で対応するとされる要素の分量が不揃いなことがあり、それを理由に折り返し構造の考え方自体が疑問視される場合がある（Frolov 2016: 21）。しかしこれは考えようであろう。対応する要素の分量に不揃いがあるのは、あらかじめ対応するスロットが決められていて（つまりあらかじめ折り返し構造が前提となっていて）、異質ないし不均等な伝承群を一つにまとめるためにスロットに入れていったという編纂の過程の結果と考えることも可能だからだ。

旧約聖書：旧約聖書全般についてはルンド（Lund 1930a）、バール・エフラット（Bar-Efrat 1980）、ラディー（Radday 1981）、ワトソン（Watson 1981）、ワルシュ（Walsh 2001）、アシス（Assis 2002）、関根（関根 1978：65–75、119–121；関根 1980：127–131、139–146）がある。創世記についてはワルシュ（Walsh 1977）、アンダーソン（Anderson 1978）がある。創世記中の洪水神話についてはヴェンハム（Wenham 1978）が、またアブラハム物語については（水野 1996）がある。出エジプト記のデボラの歌についてはガーレマン（Gerleman 1951）がある。レヴィ記についてはダグラス（Douglas 1999）、フロロヴ（Frolov 2016）がある。フロロヴはダグラス説を批判している。民数記についてはダグラス（Douglas 1993）がある。申命記についてはルンドボム（Lundbom 1996）がある。士師記についてはフロロヴ（Frolov

2016) がある。士師記とサムエル記についてはガン (Gunn 1974) がある。ルツ記についてはバートマン (Bertman 1965) がある。サムエル記下についてはホラデー (Holladay 1970)、シー (Shea 1986) がある。詩編についてはルンド (Lund 1933) がある。エゼキエル書についてはアレン (Allen 1993) がある。ハバクク書についてはウォーカー&ルンド (Walker & Lund 1934) がある。

新約聖書：新約聖書全般についてはルンド (Lund 1930b; Lund 1942)、ウェルチ (Welch 1981c)、森 (森 1994) がある。共観福音書についてはハワード (Howard 1978) がある。マタイの福音書についてはコンブリンク (Combrink 1983)、フェントン (Fenton 1959)、ロール (Lohr 1961)、ピツウト (Pizzuto 2012) がある。山上の垂訓についてはアリソン (Allison 1987) がある。パウロのコリント第一の手紙の「愛の賛歌」についてはルンド (Lund 1931) がある。ヘブライ人への手紙についてはジェラルディーニ (Gelardini 2009) がある。

ギリシア：ギリシアとラテン全般についてはウェルチ (Welch 1981d) がある。ホメロスについては (Bassett 1919; Bassett 1920; Bassett 1938)、バートマン (Bertman 1966)、ガイサー (Gaiser 1969)、ヘイデン (Heiden 2000) がある。ホメロスのうち、『イリアス』についてはマイルズ (Myres 1954)、シャイン (Schein 1997)、ホイットマン (Whitman 1958) があり、『オデュッセイア』についてはマイルズ (Myres 1952)、トレイシー (Tracy 1997)、モスト (Most 1989) がある。ヘシオドスの『神統記』についてはウォルコット (Walcot 1956) が、また『仕事と日』についてはウォルコット (Walcot 1961) がある。アリストテレス『アテナイ人の国制』についてはキーニー (Keaney 1969)、高橋 (高橋 2003) がある。悲劇『オイディプス王』についてはハヴロック (Havelock 1984) がある。ヘロドトス『歴史』についてはマイルズ (Myres 1953) がある。

ラテン：ウェルギリウス『アエネーイス』についてはダックワース (Duckworth 1954; Duckworth 1960)、クウィント (Quint 2011) がある。リウィウス『ローマ建国以来の歴史』についてはスティール (Steele 1901) がある。

他地域・他領域への広がり

聖書学、西洋古典学以外の分野でも折り返し構造の存在が認められている。

メソポタミア：シュメール、アッカドについてはスミス (Smith 1981) がある。

ウガリット：ウガリットについてはウェルチ (Welch 1981b; Segert 1983) がある。

ゲルマン：『ベオウルフ』についてはナイルズ (Niles 1979) がある。グリム童話については高橋 (高橋 1996) がある。

キリスト教：アウグスティヌス『告白』については宮本 (宮本 1994)、山田 (山田 2012)、大多喜 (大多喜 2016b) がある。

イラン：ゾロアスター教聖典『アヴェスター』(とくに「ガーサー」) については、シュミット (Schmidt 1968)、シュヴァルツ (Schwartz 2006a; 2006b)、ヒンツェ (Hintze 2002) がある。

アラブ：『コーラン』についてはカイパース (Cuypers 2015) がある。

中国：中国古典についてはマックロー (McCraw 2006) がある。『詩経』についてはリュウ (Liu 1983) がある。

日本：『古事記』については大林 (大林 1984) とマセ (マセ 1989) がある。アイヌ口承伝承については大多喜 (大多喜 2016a) がある。

ハリポッター：ハリポッター・シリーズについても折り返し構造を指摘する著作がある (Granger 2015; Spencer 2015)。

文章以外の分野

図像：ホイットマン (Whitman 1958) はホメロスの折り返し構造は幾何学模様時代の壺絵と同じ精神的産物であるとした。もう少し正確に言えば、前8世紀ギリシアにおける幾何学的思考の誕生が壺絵模様とホメロス叙事詩の両方を生み出したと論じたのである。ただし現在では折り返し構造が世界に広く認められるようになってきているので、ホイットマンの地域と時代限定の図像と文章技法の関連性の強調は改められて、より普遍的な図像と文章技法の関連性の一例と位置づけられるべきであろう。

彫刻：レヴィ=ストロースは北米北西海岸先住民文化における神話と儀礼に用いる仮面とが同じ論理のもとに構造化されていると分析してみた (Lévi-Strauss 1979, 邦訳 2018)。

建築：ギリシア神殿建築の破風では神々や敵や武器や馬車が左右で裏返し構造に配置されている。そして同じ裏返し構造による配置はローマの建築装飾 (パンテオン、ミレトスのトラヤヌス帝のニュンパエウム Nymphaeum、アウグストゥス帝廟アラ・パキス、コンスタンティヌス帝の凱旋門) にも認められる (Thomas 2013)。

アニメ：宮崎駿「千と千尋の神隠し」については大多喜 (大多喜 2014) があり、同じく「風の谷のナウシカ」と「天空の城ラピュタ」については大多喜 (大多喜 2015) がある。

8. おわりに

レヴィ=ストロース流の神話の構造分析は実に難しい。これを実践できる研究者は限られる。レヴィ=ストロースの後継者が現れないのが、そのなによりの証左である。これに対してキャンベル流の形態学的「構造」の研究は、対象こそ違っていても基本的に同じ指摘の繰り返しであり、ルーチンワークである。そして折り返し構造は両者の中間的な難度であって、決して容易とは言えないが、意識して努力すれば見つけることが可能である。構造について何か新しい研究視点を見出すには三種類の構造のうち、折り返し構造が最も可能性が高いと感じられる。

折り返し構造はさまざまな理由で用いられている。たとえば、まったく同じ表現を二度繰り返すのは単純であり、すぐに飽きられる。二度目には異なる用語で同じ内容を繰り返すとす。それは少し新しくなる。しかし二度目に、異なる用語で順番を入れ替えて同じ内容を繰り返せば、さらに新しくなるだろう。それは一つの文章でも、節でも、章でも、

作品全体でも言えることだろう。

折り返し構造の活用は文章のレベルならば無意識に行われうるだろう。そしてその効果を意識すれば、段落や作品全体というさらに大きなブロックについても意識しても用いることができる。無文字社会では即興で物語を作る際にも、そうしてできた作品を記憶に留める際にも便利な文章技法である。だが、それは聴衆にとっても同様である。物語の進行がある程度予想でき、聞いた物語をその時には完全に聞き取れなかったり、あるいは理解できなかったとしても、後で自分で補完して理解することが可能となるからだ。

これまで述べたように、折り返し構造は古くから知られていたし、それをういた作品も少なくはないが、万人に知られてきたとも、非常に多くの作品に用いられているとも言い難い。聖書学者、古典学者、神話学者の場合でも、誰でも知っているとはいえない。

理由の一つは、折り返し構造は必要不可欠な技法ではないからだろう。それなしでも文章も物語も図像も彫刻も建築も作ることができる。そしてむしろ革新的な表現にとって伝統的な折り返し構造は邪魔な場合もあるだろう。

最初に述べたように、きれいすぎる対称は静的となり、物語の進行には不都合なので、対応する要素を入れ替えたり、逆転させたりするという変化をつける必要がある。そしてそうした部分的対応の変化をうまくつけることができれば、変化に富んだしかし安定した作品の枠組みが構築できる。目立たなくても便利なら、職人氣質の叙事詩朗詠者や建築家や芸術家はあえてその存在や使用や効用を宣伝・公言しなかったのではないか。そして受け取り側では意識に上らず、しかしそれゆえ飽きられずに長らく愛好されたのではないか。

—— 参考文献

- 略号：*AJP/ American Journal of Philology*
BSOAS/ Bulletin of the School of Oriental and African Studies
CJ/ Classical Journal
CP/ Classical Philology
CQ/ Classical Quarterly
HSCP/ Harvard Studies in Classical Philology
HTR/ Harvard Theological Review
JBL/ Journal of Biblical Literature
JHS/ Journal of Hellenic Studies
PMLA/ Publications of Modern Languages Association of America
TAPA/ Transactions of the American Philological Association
VT/ Vetus Testamentum

- Allen, Leslie C. 1993: The Structure and Intention of Ezekiel I, *VT* 43, 145-161.
Allison Jr., Dale C. 1987: The Structure of the Sermon of the Mount, *JBL* 106, 423-445.
Anderson, Bernard W. 1978: From Analysis to Synthesis: The Interpretation of Genesis 1-11, *JBL* 97, 23-39.
Assis, Elie 2002: Chiasmus in Biblical Narrative: Rhetoric of Characterization, *Prooftexts* 22, 273-304.
Bar-Efrat, S. 1980: Some Observations on the Analysis of Structure in Biblical Narrative, *VT* 30, 154-173.

- Barthes, Roland 1957: *Mythologies*, Éditions du Seuil (下澤和義訳『現代社会の神話』みすず書房、2005)
- Barthes, Roland 1975: An Introduction to the Structural Analysis of Narrative, *New Literary History* 6, 237-272.
- バルト、ロラン 1979: 『物語の構造分析』、みすず書房 (『物語の構造分析序説』、「天使との格闘—「創世記」32章23—33節のテキスト分析」)
- Bassett, Samuel E. 1919: The Structural Similarity of “Iliad” and “Odyssey” as Revealed in the Treatment of the Hero’s Fate, *CJ* 14, 557-563.
- Bassett, Samuel E. 1920: hysteron proteron Homerikos (Cicero, Att. 1, 16, 1), *HSCP* 31, 39-62.
- Bassett, Samuel E. 1938: *The Poetry of Homer*, The University of California Press.
- Bertman, Stephen 1965: Symmetrical Design in the Book of Ruth, *JBL* 84, 165-168.
- Bertman, Stephen 1966: The Telemachy and Structural Symmetry, *TAPA* 97, 15-27.
- Campbell, Joseph 1949: *The Hero with a Thousand Faces*, Princeton University Press (倉田真木他訳『千の顔をもつ英雄 (上下)』早川書房、2015)
- Champagne, Ronald A. ed. 1992: *The Structuralists on Myth: An Introduction*, Garland Publishing.
- Clément, Catherine 2002: *Claude Lévi-Strauss*, PUF (Que sais-je ? 3651) (塚本昌則訳、白水社 (文庫クセジュ 1990)、2014)
- Combrink, H. J. Bernard 1983: The Structure of the Gospel of Matthew as Narrative, *Tyndale Bulletin* 34, 61-90.
- Cuypers, Michel 2015: Various Forms of Centres of Ring Composition in the Qur’an and their Interpretation, *Studia Rhetorica Biblica et Semitica* 38, 1-7.
- Douglas, Mary 1993: *In the Wilderness: The Doctrine of Defilement in the Book of Numbers*, Sheffield Academic Press.
- Douglas, Mary 1999: *Leviticus as Literature*, Oxford University Press.
- Douglas, Mary 2007: *Thinking in Circles: An Essay on Ring Composition*, Yale University Press: New Haven and London.
- Duckworth, George E. 1954: The Architecture of the Aeneid, *AJP* 75, 1-15.
- Duckworth, George E. 1960: Mathematical Symmetry in Vergil’s Aeneid, *TAPA* 91, 184-220.
- Fenton, J. C. 1959: Inclusio and Chiasmus in Matthew, Kurt Alomd et al. ed., *Texte und Untersuchungen zur Geschichte der altchristlichen Literatur* (Studia Evangelica Bd.73), Akademie-Verlag, 174-179.
- Fisch, Harold 1982: Ruth and the Structure of Covenant History, *VT* 32, 425-437.
- Frolov, Serge 2016: The Rings of the Lord: Assessing Symmetric Structuring in Numbers and Judges, *VT* 66, 15-44.
- Gaisser, Julia Haig 1969: A Structural Analysis of the Digressions in the *Iliad* and the *Odyssey*, *HSCP* 73, 1-43.
- Gelardini, Gabriella 2009: From “Linguistic Turn” and Hebrews Scholarship to *Anadiplosis Iterata*: The Enigma of a Structure, *HTR* 102, 51-73.
- Granger, John 2015: *Harry Potter as Ring Composition and Ring Cycle: The Magical Structure and Transcendental Meaning of the Hogwarts Saga*, Unlocking Press.
- Gerleman, Gillis 1951: The Song of Deborah in the Light of Stylistics, *VT* 1, 168-180.
- Gunn, D. M. 1974: Narrative Patterns and Oral Tradition in Judges and Samuel, *VT* 24, 286-317.
- Havelock, Eric A. 1984: Oral Composition in the Oedipus Tyrannus of Sophocles, *New Literary History* 16, 175-197.
- Heiden, Bruce 2000: The Placement of “Book Divisions” in the Odyssey, *CP* 95, 247-259.
- Hintze, Almut 2002: On the Literary Structure of the Old Avesta, *BSOAS* 65, 31-51.
- Holladay, W. 1970: Form and Wordplay in David’s Lament over Saul and Jonathan, *VT* 20, 153-189.
- Howard, George 1978: Stylistic Inversion and the Synoptic Tradition, *JBL* 97, 375-389.
- Jakobson, Roman 1966: Grammatical Parallelism and its Russian Facet, *Language* 42, 399-429.
- Keaney, John J. 1969: Ring Composition in Aristotle’s *Athenaion Politeia*, *AJPh* 90, 406-423.
- Kirk, G. S. 1970: *Myth: Its Meaning & Functions in Ancient & Other Cultures*, University of California Press (内堀基光訳『神話—その意味と機能』社会思想社、1976)
- Lane, Michael ed. 1970: *Structuralism: A Reader*, Jonathan Cape (篠田一士監訳『構造主義』研究社、1978)
- Leach, Edmund 1969: *Genesis as Myth*, Jonathan Cape (江河徹訳『神話としての創世記』紀伊國屋書店、1980)
- Leach, Edmund 1983: *Structuralist Interpretations of Biblical Myth*, Royal Anthropological Institute (鈴木聡訳『聖書の構造分析』紀伊國屋書店、1984)

- Lévi-Strauss, Claude 1955: The Structural Study of Myth, in Thomas A. Sebeok ed., *Myth: A Symposium*, Indiana University Press, 81-106.
- Lévi-Strauss, Claude 1958: La Structure des mythes, in *Anthropologie structurale*, Plon (荒川幾男他訳『構造人類学』みすず書房、1972、第11章「神話の構造」)
- Lévi-Strauss, Claude 1960: La Structure et la Forme: Réflexion sur un Ouvrage de Vladimir Propp, *Cahiers de l'Institut de science économique appliquée*, no.9, 3-36.
- Lévi-Strauss, Claude 1979: *La Voie des Masques*, Plon (渡辺守章他訳『仮面の道』ちくま学芸文庫、2018)
- Lévi-Strauss, Claude 1985: *La potière jalouse*, Plon (渡辺公三訳『やきもち焼の土器づくり』みすず書房、1990)
- Littleton, C. Scott 1982: *New Comparative Mythology: An Anthropological Assessment of the Theories of Georges Dumézil*, Third Edition, University of California Press (堀美佐子訳『新比較神話学』みすず書房、1981)
- Liu, David Jason 1983: Parallel Structures in the Canon of Chinese Poetry The *Shih Ching*, *Poetics Today* 4, 639-653.
- Lohr, Charles H. 1961: Oral Techniques in the Gospel of Matthew, *Catholic Biblical Quarterly* 23, 403-435.
- Loroux, Nicole, Gregory Nagy, and Laura Slatkin eds. 2001: *Antiquities* (Postwar French Thought volume III), The New Press.
- Lund, Nils Wilhelm 1930a: The Presence of Chiasmus in the Old Testament, *American Journal of Semitic Language and Literature* 46, 104-126.
- Lund, Nils Wilhelm 1930b: The Presence of Chiasmus in the New Testament, *Journal of Religion* 10, 74-93.
- Lund, Nils Wilhelm 1931: The Literary Structure of Paul's Hymn to Love, *JBL* 50, 266-276.
- Lund, Nils Wilhelm 1933: Chiasmus in the Psalms, *American Journal of Semitic Language and Literature* 49, 281-312.
- Lund, Nils Wilhelm 1942: *Chiasmus in the New Testament: A Study in Formgeschichte*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Lundbom, Jack R. 1996: The Inclusio and Other Framing Devices in Deuteronomy 1-28, *VT* 46, 296-315.
- McCraw, David 2006: Criss-cross: Introducing Chiasmus in Old Chinese Literature, *Chinese Literature* 28, 67-124.
- マセ、フランソワ 1989: 古事記神話の構造、中央公論社
- 松村一男 2019: 神話学入門、講談社学術文庫
- 宮本久雄 1944: アウグスティヌス文学のヘブライ的地平—『告白録』第一～九巻における「キアスムス(交差対応的配列法)」構造、『パトリスティカ: 教父研究』13、142-148
- 水野隆一 1996: アブラハム物語の構造 I、『神学研究』43、1-16
- 森彬 1994: 聖書の集中構造(下) 新約篇、ヨルダン社
- Morris, Ian and Barry Powell eds. 1997: *A New Companion to Homer*, Brill.
- Most, Glenn M. 1989: The Structure and Function of Odysseus' *Apologoi*, *TAPA* 119, 15-30.
- Myres, John L. 1952: The Pattern of the Odyssey, *JHS* 72, 1-19.
- Myres, John L. 1953: *Herodotus: Father of History*, Clarendon Press.
- Myres, John L. 1954: The Structure of the *Iliad*, Illustrated by the Speeches, *JHS* 74, 122-141.
- 中務哲郎 2013: リングコンポジション、『図書』773、54-57
- Niles, John D. 1979: Ring Composition and the Structure of Beowulf, *PMLA* 94, 924-935.
- 大多喜紀明 2014: アニメーション映画『千と千尋の神隠し』にみられる二重の異郷訪問話譚構造について: ミハイ・ポップの「裏返し」モデルを適用した場合、『国語論集』(北海道教育大学) 11、77-89
- 大多喜紀明 2015: 宮崎駿のアニメーション映画『風の谷のナウシカ』および『天空の城ラピュタ』を題材としての構造分析、『北海道言語文化研究』(室蘭工業大学) 13、103-122
- 大多喜紀明 2016a: アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造: 異郷訪問譚によらない事例、『北海道言語文化研究』(室蘭工業大学) 14、45-72
- 大多喜紀明 2016b: アウグスティヌス『告白録』1-9巻のキアスムス構造に関する考察、『人間生活文化研究』26、542-550
- 大林太良 1984: 異郷訪問譚の構造、『東アジアの王権神話: 日本・朝鮮・琉球』弘文堂、第9章、145-169
- Pizzuto, Vincent A. 2012: The Structural Elegance of Matthew 1-2: A Chiastic Proposal, *JBL* 74, 712-737.

- Pop, Mihai 1973: Neue Methoden zur Erforschung der Struktur der Märchen, Felix Karlinger herausgegeben, *Wege der Märchenforschung*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 428-439.
- Propp, Vladimir 1928: *Morfologia skazki*, Leningrad: Nauka (2nd ed. 1969. 北岡誠司・福田美智代訳『昔話の形態学』水声社、1987)
- プロップ 2009: 魔法昔話の構造的・歴史的研究—レヴィ=ストロース教授の批判に答える—、『魔法昔話の研究』(斎藤君子訳) 講談社学術文庫、第一章
- Quint, David 2011: Virgil's Double Cross: Chiasmus and the *Aeneid*, *AJP* 132, 273-300.
- Radday, Yehuda T 1981: Chiasmus in Hebrew Biblical Narrative, in Welch ed. 1981a, 50-117.
- Raglan, Lord 1936: *The Hero: A Study in Tradition, Myth, and Drama*, Methuen (大場啓仁他訳『文化英雄—伝承・神話・劇』太陽社、1975)
- Rank, Otto 1914: The Myth of the Birth of the Hero, *Journal of Nervous and Mental Disease* Series No.18 (野田倬訳『英雄誕生の神話』人文書院、1986)
- Schein, Seth 1997: The *Iliad*: Structure and Interpretation, in Morris and Powell 1997, 345-359.
- Schmidt, H.-P. 1968: Die Komposition von Yasna 49, in *Pratidatum: F. J. Kuiper*, Mouton: London, 170-192.
- Schwartz, Martin 2006a: The Gathas and Other Old Avestan Poetry, in G.-J. Pinault and D. Petit ed. *La Langue Poétique Indo-européenne*, Paris.
- Schwartz, Martin 2006b: Gathic Compositional History, Y 29 and Bovine Symbolism, in Siamak Adhami ed., *Paitimana: Essays in Iranian, Indo-European, and Indian Studies in Honor of Hanns-Peter Schmidt*, Mazda: Costa Mesa, 194-249.
- Segert, Stanislav 1983: Parallelism in Ugaritic Poetry, *JAOS* 103, 295-306.
- 関根正雄 1978: 旧約聖書文学史 上、岩波書店
- 関根正雄 1980: 旧約聖書文学史 下、岩波書店
- Shea, William H. 1986: Chiasmus and the Structure of David's Lament, *JBL* 105, 13-25.
- Smith, Robert F. 1981: Chiasm in Sumero-Akkadian, in Welch ed. 1981a, 17-35.
- Spencer, Richard A. 2015: *Harry Potter and the Classical World: Greek and Roman Allusions in J. K. Rowling's Modern Epic*, McFarland & Co.
- Steele, R. B. 1901: Anaphora and Chiasmus in Livy, *TAPA* 32, 154-185.
- 高橋秀樹 2003: 伝アリストレス作『アテナイ人の国制』に見られる伝承操作の技法、鈴木佳秀編『神話・伝説の成立とその展開の比較研究』高志書院、61-75
- 高橋吉文 1996: グリム童話 冥府への旅、白水社
- Thomas, Edmund 2013: Chiasmus in Art and Text, *Greece & Rome* 60, 50-88.
- Tracy, Stephen 1997: The Structure of the *Odyssey*, Morris and Powell 1997, 360-379.
- Walcot, Peter 1956: The Text of Hesiod's Theogony and the Hittite *Epic of Kumarbi*, *CQ* 6, 198-206.
- Walcot, Peter 1961: The Composition of the Works and Days, *Revue des Études Grecques* 74, 1-19. Walker, H.H.
- Walker, H. H. and N. W. Lund. 1934: The Literary Structure of the Book of Habakkuk, *JBL* 53, 355-370.
- Walsh, Jerome T. 1977: Genesis 2:4b-3:24: A Synchronic Approach, *JBL* 96, 161-177.
- Walsh, Jerome T. 2001: *Style & Structure in Biblical Hebrew Narrative*, Collegeville, Minnesota: The Liturgical Press.
- Watson, Wilfred G. E. 1981: Chiastic Patterns in Biblical Hebrew Poetry, in Welch, John W. ed. 1981a, 119-168.
- Welch, John W. ed. 1981a: *Chiasmus in Antiquity: Structure, Analyses, Exegesis*, Provo, Utah: Research Press at Brigham Young University.
- Welch, John W. 1981b: Chiasm in Ugaritic, in Welch, John W. ed. 1981a, 36-49.
- Welch, John W. 1981c: Chiasmus in the New Testament, in Welch, John W. ed. 1981a, 211-249.
- Welch, John W. 1981d: Chiasmus in Ancient Greek and Latin Literature, in Welch, John W. ed. 1981a, 250-268.
- Welch, John W. & Daniel B. McKinlay eds. 1999: *Chiasmus Bibliography*, Provo, Utah: Research Press at Brigham Young University.
- Wenham, Gordon J. 1978: The Coherence of the Flood Narrative, *VT* 28, 336-348.
- Whitman, Cedric H. 1958: *Homer and the Heroic Tradition*, Harvard University Press.

山田庄太郎 2012: アウグスティヌス『告白』のキアスムス構造に於ける新プラトン主義、『宗教学・比較思想学論集』、45-57